

管内と畜場で認められた牛の全身性腫瘍症例について(第二報)

千葉県南総食肉衛生検査所 ○吉川真布、宮木尚子、浦野圭司、
加藤秀男

千葉県東総食肉衛生検査所 伊藤教子、川合ちず子、酒井利郎、
細谷和邦

はじめに

千葉県内では全身性腫瘍として全部廃棄される頭数に増加傾向がみられ、そのうち、南総食肉衛生検査所が管轄すると畜場(以下管内と畜場)の牛が大部分を占めている。また、管内と畜場は千葉県下で唯一乳廃用牛を処理しているため、千葉県内における乳廃用牛の全身性腫瘍発生状況把握が可能であると考えられる。そこで、平成 18 年に管内と畜場において全身性腫瘍で廃棄された牛を病理学的に調査したところ、そのほとんどが牛白血病であることが明らかとなった。

牛白血病はその多くが地方病型牛白血病であるといわれており、牛白血病ウイルス(BLV)による感染症であること、確立した治療法がないこと等の理由により、全国的に増加傾向である。

そのため、当所では平成 19 年 10 月から全身性腫瘍で全部廃棄措置された牛について病理学的検査を行い、牛白血病の発生状況を把握することとした。

今回、平成 19 年 10 月からの牛白血病の発生状況を整理すると共に、一般畜の BLV 抗体保有状況の調査を行ったので報告する。

材料および方法

平成 19 年 10 月から平成 20 年 3 月にかけて管内と畜場で全身性腫瘍として廃棄された牛 15 頭についての年齢分布、産地を調査。また、心臓(主に心室中隔、心冠部)、腎臓、腫瘍化したリンパ節等を採材し、肉眼検査および病理組織学的検査を行った。加えて、平成 20 年 6 月から 7 月に一般畜として検査された牛 200 頭について、血清学的検査を行った。

成績

1. 年齢分布

全身性腫瘍として廃棄された牛 15 頭の月齢分布は、27～116 ヶ月齢(平均 76 ヶ月齢)であった。

2. 産地

15 頭全てが千葉県産の牛であり、農場所在地は県内各地であった。

3. 生体検査

5 頭が起立不能の症状を呈していたため、病畜として検査された。又、一般畜として検査されたうちの 1 頭ではやや消瘦を認めた。その他の牛には著変を認めなかった。

4. 肉眼検査および病理組織学的検査

1) 肉眼検査

多くの牛で腫瘍浸潤と思われる心臓の腫大を認め、特に心冠部及び心耳では顕著であった。又、胃・腸管に沿って腫瘍塊を認めた症例もあった。認められた腫瘍塊は白色・充実性で脆弱であった。

2) 病理組織学的検査

全ての症例でリンパ球様細胞のび漫性増殖を認めた。

その結果、肉眼所見および病理組織学的所見より 15 頭全てが牛白血病と診断された。

5. 血清学的検査

200 頭中 37%が BLV 抗体陽性を示した。飼育地域別に集計を行うと、千葉県では 118 頭中 47.5%と全体の平均値よりも高い数値を示した。また、千葉県では弱年齢層でも高い水準の数値を示した。

考察

今回、精密検査した全身性腫瘍措置牛は全てが牛白血病であった。前年(H18)に調査したものでは 37 頭中 91%が牛白血病と診断された。そのため全身性腫瘍として全部廃棄される牛の大部分が牛白血病であると推測される。又、今回検査した 15 頭全てが千葉県産牛であったため、千葉県内で BLV に感染したと考えられる。加えて、広範囲の月齢の牛に発症していること、千葉県下において弱年齢層でも高い水準の抗体陽性率であることを考慮すると、千葉県内ではあらゆる年齢層において BLV が蔓延していると考えられる。

牛白血病は全国的にも増加してきているとされており、この増加傾向を食い止める必要がある。そのため第一歩として本調査結果に限らず継続的に調査を行い、その都度、畜産農家にフィードバックし、相互連携の強化をすることが重要であると考えている。

今回、この調査結果から家畜伝染病予防法第4条第1項に基づき、伝染性疾患の届出を平成 20 年 3 月 31 日に千葉県東部家畜保健衛生所へ行った。